

氏名(本籍)	ひがの とも こ 日賀野 友子 (栃木県)		
学位の種類	博士 (芸術学)		
学位記番号	博乙第 1,421 号		
学位授与年月日	平成10年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	芸術学研究科		
学位論文題目	オーブリー・ヴィンセント・ピアズリー研究 —テキストを超える挿絵—		
主査	筑波大学教授	Dr. phil	中山 典夫
副査	筑波大学教授		三神 弘彦
副査	筑波大学助教授	博士 (芸術学)	五十殿 利治
副査	愛知県美術館副館長		長谷川 三郎

### 論文の内容の要旨

1998年にオーブリー・ヴィンセント・ピアズリー没後100年を迎える。19世紀のイギリスは、機械化の時代、大量生産化の時代であると同時に、初等教育の普及による識字率の増大、30年代頃から顕著になり始めた都市への人口の集中、そして市民階級の擡頭も相俟って、出版物の需要が大幅に拡大した時代であった。さらに、写真術の印刷技術への導入が、出版物の在り方を大きく変えた時代でもある。その時代にあって、ピアズリーの芸術は人々に新鮮な驚きと強い衝撃を与えた。彼は、常に文学と深い関わりを持った美術家であり、ジャーナリズムの隆盛が育てた天才であった。

19世紀の中頃以降、挿絵入り書物におけるテキストと挿絵の主従関係は明からであった。挿絵はテキスト作家が言葉で意味するところを、画家の絵で説明するものであり、その担う役割は二義的なものとされていたのである。挿絵入り書物における挿絵自体は、高い芸術性を期待されるものではなかった。しかし、この常識を破ったのがピアズリーであった。彼は挿絵をテキストの軛から解き放ち、絵解きとされていた挿絵をそれ自体独立した価値を持つ芸術作品へと高めた。この時、挿絵には新しい価値と意味が与えられた。ピアズリーの芸術は文学を土台とし、それを超えた。そのピアズリーが辿った経過とその成果を明らかにしようとするのが本論文の目的である。

本論文は、序言に続く四つの章、結語、巻末のピアズリー年譜、参照文献表、「資料」として本文中に引用された言葉の欧語原文の採録、そして別冊の図版から成る。

本論文は、本論に入るに先立って、ピアズリー研究の今日の状況、19世紀後半のイギリス美術における挿絵および挿絵画家の位置、従来の挿絵とピアズリーの挿絵の関係を考察する。そしてそれを踏まえて、挿絵画家ピアズリーの誕生、その独自性や様式の確立、そして彼が芸術上の頂点を迎えるまで、その道程が、作品の制作年や特質毎に三段階に分けて考察される。

第I章に於いては、主としてイギリス本国でのピアズリー研究の今日の状況と、ピアズリーと彼の周囲の挿絵画家に見る特質の違い、ピアズリーの日本趣味についての様々な見解、わが国におけるピアズリーの紹介と研究が、総括的に述べられている。そこではまた、第II章以下で著者がどのような立場でピアズリー作品の芸術上の変化を考察していくかを明らかにしている。

続いて、この特異な美術家の幼年、少年期の環境を知るために、画家として生きることが決まるまでのピアズ

リーの略伝が、「付録」として簡潔にまとめられている。

第Ⅱ章に於いては、15世紀に生まれた長大な叙事詩を19世紀の末に装いを新たに世に出したデント版『アーサー王の死』を軸に、その挿絵を委ねられた未だ20歳前の若者ビアズリーが挿絵画家として登場する経緯、その際彼が受けた影響の源、そして彼の独自性の萌芽についての考察がなされる。

そして、この段階でのビアズリーの作品には、エドワード・コリー・バーン＝ジョーンズとの出会いによるその様式の摂取および模倣、バーン＝ジョーンズの同志ウィリアム・モリス個人に対する反発とその装飾性への敵対意識、ジェイムズ・マクニール・イホッスラーを通して採り入れた日本美術のモチーフとその手法の考察、およびギリシア的要素の摂取など、多くの刺激や影響の混和が確認される。

第Ⅲ章に於いては、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵と、文芸季刊誌『ザ・イエロー・ブック』での活躍を中心に、ビアズリーの強烈な個性の湧出と、『サロメ』の詩人との関係から突然彼を襲った悲運、そしてそれが彼の芸術に及ぼした影響についての考察がなされる。

そして、この段階でのビアズリーの作品には、風刺的、嘲笑的な描写、捍ましく背筋の凍るばかりの表現が見られ、そこに、彼が挿絵画家として独自の様式を確立する重要な特質が現れているとし、この時代は、彼の芸術がワイルドの逮捕、投獄と結び付けられ、ジャーナリズムや世間の非難の的とされ、彼にとっては試練の時代でもあったことが述べられる。

第Ⅳ章に於いては、文芸誌『ザ・サヴォイ』での活動と、18世紀の詩人アレクサンダー・ポープの詩篇『髪盗み』の新たな版の彼の挿絵を取り上げ、ビアズリー芸術の完成された手法についての考察がなされる。この時代は、自ら「文士」たるべく活動の範囲を広げた彼自身のローマン的物語『丘を下って』に付けられた挿絵や、『髪盗み』の挿絵にあるような「美しい表現に凝縮された」(ジョン・ローゼンスタイン)描写の時代でもあった。

この段階でのビアズリーの作品には、物語や彼自身の時代、地域を超えた流行が採り入れられ、模倣者の追従を決して許さない優雅で繊細な描写が極められたと述べ、そして、此处でビアズリーの芸術は、洗練された独自の絵画的空間を構築するに到り、その頂点を迎えた結論づけられる。

## 審査の結果の要旨

本が希少で高価な時代には、そこに挿まれる絵も厳選され、芸術としての質の高さが求められた。19世紀の30年代以来イギリスに於いては、人口は急増し、初等教育の充実が図られた。1831年から1901年の間に人口は3倍になり、1832年の政府の教育補助は20,000ポンドであったが、1876年のそれは、1,600,000ポンドに達したという。それに写真術の応用などの技術の高度化も相俟って、印刷物は大量に廉価に生産されるようになった。それに伴って挿絵美術は外面的には隆盛を迎えたが、その芸術としての質を急激に低下させていった。

このようなイギリス挿絵美術の世界に、19世紀の末、彗星の如く現れ、そして消えて行ったのがビアズリーであった(彼の活躍期は1892年から97年までの僅か5年足らずであった)。彼の新しい芸術は、挿絵をテキストを越える存在へと高めた。著者の言葉を借りれば、「テキストの言葉が語り得ない、〈線と形〉の新しい世界を挿絵でもって作りあげ、挿絵を美術史の流れにおける一つの独立したジャンルにまで高めた」のであった。そしてその芸術は、後のイギリスのみならずヨーロッパ大陸の新美術様式(アール・ヌーヴォー、ユーゲントシュティール、ゼツェッション)、さらにパウル・クレー、クリムト、ココシュカなど、20世紀美術の巨匠たちに測り知れぬ影響を及ぼした。

本論文の功績は、19世紀末あるいは今世紀初頭に世に出た美術家自身の夥しい数の手紙、インタビュー記事、彼と時代を共にした友人たちの回想、そして何よりも彼が挿絵を描いた文学作品や文芸誌、それら膨大な一次資料を可能な限り蒐集し、緻密に吟味し、束の間に輝き、しかし鮮やかな光芒を残して去った美術家ビアズリーの芸術の誕生と成長を克明に追い、その芸術の深秘を説得力をもって説き明かしたことである。

その際著者は、今日のビアズリー研究に於ける彼の芸術の評価と、特に我国に於いて繰り返し主張される彼の芸術への日本趣味の強いとされる影響に疑問を抱く。ビアズリーの芸術の評価にあっては、彼の「エロティシズム」、「グロテスク」、「デカダンス」なるものが、あまりにも世に広く喧伝され、それゆえにまたこの美術家の名をいっそう世に知らしめてきた。著者は、世紀末の繊細な一芸術家に圧されたこの烙印を客観的に見詰め直し、それが真実と遠く離れた風評に過ぎないことを確かめた。そのようにして雑音は消され、此処に自らの目指す芸術を真摯に追求する若い芸術家の姿が浮き彫りにされた。ビアズリーの中の日本趣味について著者は、19世紀末のロンドンの状況、また日本趣味を売り物にした先輩画家J. A. M. ホイッスラーとの関係をつぶさに考察し、画家自身の言葉「日本の美術品はどこでも目にすることができる」に立ち返り、自らの様式確立期の美術家が、日本趣味だけでなく、古代ギリシア、中世、ルネサンス、ロココ、同時代のフランスの美術など、あらゆるものを貪欲に摂取していたことを明らかにした。これらのことも、本論文の大きな功績である。

最後に、全編を貫く圧縮された簡潔な言葉による達意の文章、論を進めるにあたって欠くことのできない作品のみを厳選し、詳細なデータを添えた気品ある別冊の図版も評価される。

以上の諸点から、本論文は独自性のある高度な論攷であり、今後の近代イギリス美術史の研究に大いに貢献するものと認められる。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。